

2019年度

K 1

国 語

2月25日(月)
【前期日程】

人文社会科学部 (社会学科・言語文化学科・法学科)
教育学部 (学校教育教員養成課程)
【音楽教育・美術教育・保健体育教育専修は除く】
地域創造学環 (選抜方法A)
15:20~16:40

注 意 事 項

試験開始前

- 1 監督者の指示があるまで、問題冊子、解答用紙に手を触れてはいけません。
- 2 監督者の指示に従って、全部の解答用紙(4枚)に受験番号を記入しなさい。

試験開始後

- 3 この問題冊子は、6ページあります。はじめに、問題冊子、解答用紙を確かめ、枚数の不足や、印刷の不鮮明なもの、ページの落丁・乱丁があった場合は、手をあげて監督者に申し出なさい。
- 4 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 5 問題は、声を出して読んではいけません。
- 6 各問ごとの配点は、比率(%)で表示してあります。

試験終了後

- 7 問題冊子は、必ず持ち帰りなさい。

問題訂正

科目 国語 (K1)

訂正箇所

5ページ

問題

2

本文(原文)

5行目

(誤)

物の憑つき給へるか」といひければ、

何条物なんであの…

(正)

物の憑つき給へるか」といひければ、

「何条物なんであの…

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(配点六〇%)

もう一昨年のことになるが、イギリスのオックスフォード辞典が、二〇一六年の「今年の言葉」として「ポスト真実」を選んだと聞いたときのことはいまだに忘れられない。三〇年近くにわたってテレビメディア、しかも報道番組に関わってきた者として、「ポスト真実」、つまり客観的な事実や真実よりも、感情的な訴えかけが多くの人に影響を与え、世論形成に大きなインパクトをもたらし始めているとの指摘は、まるでこれまでの自らの仕事を否定されたかのように思えるほどのショウゲキを私に与えた。

すぐに私は、当時、日経新聞に連載していたエッセイで、こう書いた。

「ポスト真実という言葉の誕生は、真実を取るに足らないものと受け止める社会の広がりのようにも思え、ジャーナリズムにとって深刻な事態だ。」
「真実を踏まえて人々は判断するというのが健全な民主主義だったはずなのは、「いささか青臭い問いだと書きつつも、これが正直な思いだった。」

ポスト真実の時代、それは人々が、真実よりも自分の感情に寄り添う情報のほうを信頼してしまう、自分が共感できることだけを信じるようになってしまう時代だ。確証バイアスという言葉があるように、人は、自分があらかじめ共感できるものを裏付ける情報だけを重視する傾向がある。しかし、そういう情報だけを集めれば、自分がもともと持っていた考え方をより強固にし、それに反する意見には耳を傾けないどころか、排除してしまうことにつながる。

フェイスブックでつながった友達、ツイッターでフォローしている人々から送られる情報にばかりアクセスしていると、多様な情報に接しているつもりでも偏った情報、自分が共感しやすいものだけに接してしまいがちになる。こうしたなかで多様な人々の存在、自分とは異なる多様な考え方があつて知る機会が減っていく。それぞれが固有の情報空間のなかでの対話だけを行うようになり、人々の間に情報の分断、お互いの排除さえ起きてくる。いま、社会はその傾向を強めている。

一九九三年から二三年間、「クローズアップ現代」のキャスターを務めてきて、毎日が試行錯誤の連続だった。とはいえ、閉塞感へいさくがあふれる社会のなかで、様々な社会的課題に対し、その解決に向けての議論の場を提供し、合意形成を促していくことが「クローズアップ現代」の存在意義だと思つてきた。言わば、議論を促す情報のプラットフォームを提供する番組だと思つて続けてきたのだ。放送に向けて重ねられた記者やディレクターたちの取材と、それによって明らかにされた多くの事実の積み重ね。その事実をどうという視点から見えていくことで課題の本質が浮き上がってくるのかというフレームと、そのフレームを多角的に提供する番組ゲストや私自身の問いかけ。番組全体として、事実の持つ深さや豊かさを伝えようと努力をしてきた。

しかし、事実の持つ深さや豊かさではなく、たとえ根拠が定かでなくとも、感情的に寄り添いやすい情報に向かつて多くの人々が、そして社会が流されていくのであれば、合意形成を促す情報のプラットフォームは、その役割を失ってしまう。私が関わった「クローズアップ現代」に限らず、多くのジャーナリズムは、大なり小なり同じ役割を果たそうとしてきたわけであり、ポスト真実の時代の到来により、これまでのメディアはその存在意義を問われているように思える。

もちろん、これまでのテレビの報道番組、そしてジャーナリズムが、取材によって積み重ねられた事実を媒介として、視聴者や読者とつねに安定した関係をキズ⁽¹⁾いてきたわけではない。二〇一七年に出版した自著『キャスターという仕事』で紹介したように、アメリカのジャーナリスト、デイヴィット・ハルバースタムは、一九九三年の来日講演で、「視聴者は、すでに持っている偏見で違った習慣を持つ人たちを見ることを望んでいる。それは、偏見を取り除くために、より深く考えることよりも、既存の偏見を認めることのほうがはるかに楽だから。」と語っている。視聴者は、あらかじめ自らが持っている感情を大事にし、たとえそれが偏見であろうと、その感情に訴えかけてくる情報に寄り添ったほうが、楽なのだ。しかし、だからこそ、ジャーナリズムは存在しなければならぬとハルバースタムは二五年前に語っていた。感情的な訴えかけのほうが人々に影響を与えるからこそ、それに抗するように、ジャーナリズムは、人々がその偏見を乗り越えて、世界をありのままに見ることができ、より深い理解に至ることに役立たなければならぬのだ。

このことは、メディアに関わる者にとって自明だったはずであり、とりわけテレビメディアという、映像を主体とするメディアにとっては、感情に訴える要素が多いだけに、このことは重要だと私には思えた。テレビの報道番組において、視聴者の感情に寄り添おうとするテレビメディアが陥りやすいユウワク⁽²⁾からどう逃れるかをつねに意識すること、二三年間の「クローズアップ現代」の経験はそれを教えてくれていたのだ。

しかし、その思いとすれ違うように、ポスト真実の時代は到来した。

メディアの視聴者や読者は、いまや、楽であるからだけでなく、より積極的、能動的に、自らの感情や思いに沿ったものだけを、メディアが提供する情報のなかから選ぶようになったのだ。そして、そのことは、もう一歩進んで、自らの感情が一体化できる情報をより多く提供してくれるメディアだけに接するようになる傾向をも示している。情報をメディアから選択するのではなく、一体化できるメディアの選択へという変化が生まれつつあるように思える。

こうして、視聴者や読者、現在のメディアの受け手は、これまでメディアを通して得ていた、異質なものに触れる機会を失いつつある。

この背景になにがあるのか、明確な答えはない。しかし、この傾向が強まっていく社会に起こっていたのは、経済格差の拡がり⁽³⁾と、それがもたらす不公平感の高まりだ。そのことと、自らが共感できる、感情が一体化できる情報だけを取り込み、異質なものは排除していくというポスト真実の流れ

は、無縁とは思えない。むしろ経済格差の拡大によって進みつつある社会の分断は、情報空間の分断によって一層進んでいくことになるかもしれない。

これまで受け手側のメディア・リテラシーの高まりのなかで、それにきちんと向き合うためにも、伝える側の人間は、思い込みや先入観、偏見から自由になることで、いかにして物事の本質に迫れるかという努力を重ねてきた。しかし、受け手自身が、真実や事実にとだわること(注)をホウキしてしまつたのならば、伝え手は、どう振る舞おうとするだろうか。

危惧されるのは、受け手側が、事実や真実によりどころを求めるのではなく、感情による一体化ができる情報だけを取り込むようになると、メディアもその受け手の感情に寄り添うように、受け手の共感を得やすい情報を積極的に流すようになることだ。それは視聴率や読者の増加につながる。そうなると、その感情に乗れない人にまで同調圧力をかけて、感情の一体化さえ促してしまうことにもつながる。

社会が分断され、加えて財政難と低成長にも直面するなか、課題が互いに力(注)み合い、課題解決に向けた合意形成はますます難しくなっている。そして急速に進む技術革新によって、ますます時代の流れに個人が翻弄(はんろう)されるなか、一人ひとりが将来を考え、自分の生き方を選択していくことが困難になつていようにも思える。しかし、だからこそ長期的で多角的な情報を得て、自分の置かれた状況を俯瞰(ふくかん)することが必要であり、多くの課題解決を目指した社会的合意形成に向けた対話に積極的に参加していかなくてはならない時代なのだ。その必要に(注)応えて異質なものの提示、多様性の提示というメディアの役割は一層重要になつてはいるはずだ。

(国谷裕子「ポスト真実時代のジャーナリズムの役割」による)

(注) ○オックスフォード辞典——オックスフォード大学出版部が刊行する記述的英語辞典。

○デイヴィット・ハルバースタム——ニューヨークタイムズ記者、著述家。

問一 傍線部(ア)のカタカナの部分に漢字に改めなさい(解答は楷書ではつきり書くこと)。

問二 傍線部①「その役割」とあるが、それはどのような役割か。本文の内容に即して、五〇字以内で説明しなさい(句読点なども一字と数える)。

問三 傍線部②「このことは重要だ」とあるが、筆者はなぜそう考えるのか。本文の内容に即して、テレビメディアと視聴者の関係性を踏まえながら九〇字以内で説明しなさい(句読点なども一字と数える)。

問四 傍線部③「これまでメディアを通して得ていた、異質なものに触れる機会を失いつつある」とあるが、筆者はなぜそう考えるのか。本文の内容に即して、一四〇字以内で説明しなさい(句読点なども一字と数える)。

問五 筆者は、「ポスト真実時代のジャーナリズムの役割」について論を進めている。筆者の主張に対して、あなたの意見や考えを三〇〇字以内で述べなさい(句読点なども一字と数える)。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(配点二〇%)

これも今は昔、絵仏師良秀といふありけり。家の隣より火出で来て、風おし掩おほひて責めければ、逃げ出でて大路へ出でにけり。人の書かする仏もおはしけり。また衣着ぬ妻つと子なども、さながら内にありけり。それも知らず、ただ逃げ出でたるを事にして、向ひのつらに立てり。見れば、すでに我が家に移りて、煙、炎くゆりけるまで、大方向ひのつらに立ちて眺めければ、あさましき事とて、人ども来とぶらひけれど、騒がず。「いかに」といひければ、向ひに立ちて、家の焼くるを見て、うち頷うなづきて、時々笑ひけり。「あはれ、しつるせうとくかな。年比としひらはわるく書きけるものかな」といふ時に、とぶらひに來たる者ども、「こはいかに、かくては立ち給へるぞ。あさましき事かな。物の憑よき給へるか」といひければ、何条物の憑なんぢくべきぞ。年比不動尊の火焰くわんを悪しく書きけるなり。今見れば、かうこそ燃えけれど、心得つるなり。これこそせうとくよ。この道を立てて世にあらんには、仏だにによく書き奉らば、百千の家も出で来なん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜おしみ給へ」といひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。その後のちにや、良秀がよぢり不動とて、今に人々愛で合へり。

(『宇治拾遺物語』による)

(注) ○せうとく——もうけもの。 ○わたうたち——我党、すなわち「おまえたち」。

問一 傍線部Aと同じ意味の助詞・助動詞を、二重傍線部①～⑤から一つ選び、記号で答えなさい。

問二 傍線部Bで、良秀にとって「せうとく」とは何か、わかりやすく説明しなさい。

問三 傍線部Cを現代語訳しなさい。

問四 この説話が元となって書かれたと言われる芥川龍之介の小説を次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 羅生門 イ 齒車 ウ 偷盜 エ 地獄変 オ 西方の人

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。設問の都合で、返り点や送りがなを省略したところがあります。(配点二〇%)

貞観十二年、太宗謂侍臣曰、「林深則鳥棲、水広則魚游、仁義積則物自
 歸之。②人皆知畏避災害、不知行仁義。行仁義則災害不生。夫仁義之道、
 之在①心、常令相繼。若斯須懈惰、去之已遠。猶如飲食資身、恒令腹飽、
 乃可存其性命。王珪頓首曰、「陛下能知此言。天下幸甚。」

〔貞観政要〕による

(注) ○貞観——唐王朝の年号。

○太宗——唐王朝第二代目の皇帝・李世民のこと。

○物——ここでは人のこと。

○斯須——しばし。ほんのわずかの時間。

○懈惰——おこたり、なまけること。

○性命——生命と同じ。

○王珪——太宗の侍臣のひとり。

○頓首——地に頭を打ちつける丁寧なおじぎ。

問一 傍線部①について、「之」の指すものが具体的にわかるように現代語訳しなさい。

問二 傍線部②を書き下し文にしなさい。

問三 傍線部③について、「此言」の指すものが具体的にわかるように説明しなさい。